

“国際教育の北星”を確立するために

私立大学等改革総合支援事業タイプ4（選定：平成28、29年度）



北星学園大学

取組のポイントや補助効果

- ◆ 私立大学等改革総合支援事業への申請に伴い、国際教育のあり方についての再検討を実施
- ◆ 全学的にグローバル化のイメージを共有し取り組みを促進

北海道札幌市にある北星学園大学は、1962年に文学部英文学科、社会福祉学科各50人の入学定員で設置された。現在は文学部、経済学部、社会福祉学部の3学部8学科からなり、収容定員3,000人を超える大学である。

建学の精神は「世にあって星のように輝く」であり、キリスト教に基づき人間性、社会性、国際性を備えた人材の育成を目指した教育を実践している。

私立大学等改革総合支援事業タイプ4（グローバル化への対応）に選定され、国際教育の取り組みに力を入れている当大学に話を聞いた。

取組に至る背景や問題意識

開学以来、地域・社会・世界に開かれた大学を目標に、キリスト教に基づく人格教育を行い、内外のあらゆる人と触れ合う機会を設け、人間性を育む教育を実践している。北海道内の大学としては早くから積極的に国際交流に取り組んできたが、他大学も国際化を進めてきているため、このままでは当大学の長が埋没してしまうという危機感が生じていた。

“国際教育の北星”と言われ続けるためには、今まで以上に力を入れて国際化の取り組みを展開しなくてはならない。この思いから、

2015年に「国際化ビジョン（到達目標）」を策定し、国際教育プログラムについての検討が始まった。

開学当初から設置されている英文学科の学生だけではなく、他学科の学生も毎年90から100人ほどが、留学も含め海外研修等に参加している。必ずしも国際交流イコール英文学科ではなく、英語を専門的に学ぶ学生以外でも英語を普通に話せる学生を育てるという方針だ。

1965年にアメリカのルイス&クラーク大学と姉妹校提携を結んで以来、積極的に国際交流活動を展開してきた。これまで700人を超える学生が世界中に留学し、アメリカ、イギリス、台湾等9か国から1,500人以上の留学生を受け入れている。これらの活動実績を踏まえて、国際化ビジョンは策定されている。

取組の目標・目的

具体的な国際化ビジョンとして、「グローバル化時代に対応するカリキュラムを展開し、国内および世界で活躍できる人材を育成する」、「多様な国際交流活動を通じ、地域の国際化にも貢献する」を到達目標とした「北星国際交流2020」を策定している。海外へ送り出す学生数の増加、受け入れ留学生数の増

加、キャンパスの国際化について、2020年度までに達成すべき目標を定め、以下の取り組みを推進している。

取組内容

国際ラウンジ

2015年度にキャンパスの中心に位置するセンター棟内に設置された、国際交流を推進するための常設スペースである。「学生を応援する、学生が主体的な活動ができる空間」をコンセプトとし、他大学の施設を参考にしながら、設計の段階から留学生との交流促進プログラム展開の場をイメージしている。

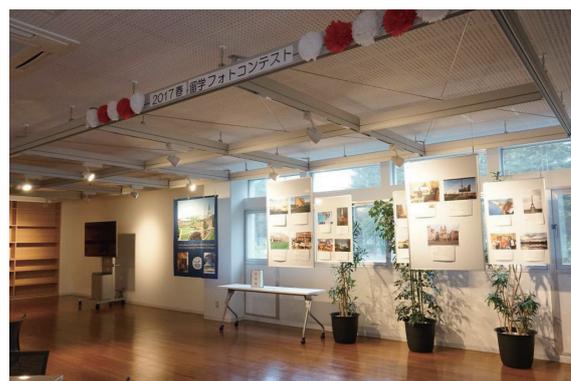
当ラウンジを設置する際には学生からヒアリング調査を行い、教員、職員、学生で意見交換の場を設けた。学生目線でどのように使いたいのかという意見を尊重しながら作り上げたことがポイントである。従前は交換留学生が来ても交流する場所と機会がなく、交流は特定の学生に限定される傾向にあった。そのため、より多くの学生がオープンに交流できる場を作ろうという視点で計画を進めていった。

国際教育に関する業務を行う国際教育課は

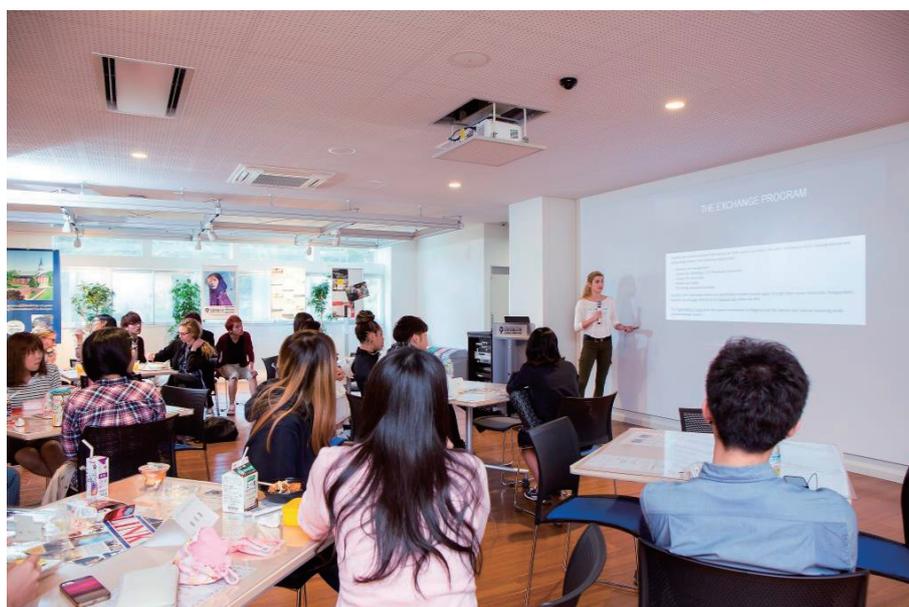
学生支援を行う部署と同じ建物内にあったが、当ラウンジの設置にあわせてセンター棟に移した。学生の動線を考え、国際教育に関するサービスをキャンパスの中心にある建物に集約することで、より学生が集まりやすく、国際交流の活性化が図れるようにしている。

飲食自由のラウンジなので、学生はランチを食べたり、勉強したりするための場として活用している。同じ空間で派遣留学報告会や、外国語朗読会、留学生によるアンバサダープログラムや日本語スピーチ発表会等のプログラムが行われているため、「国際的なことが行われている場所」というイメージが学内で浸透している。

他にも留学フォトコンテストや海外勤務の卒業生による体験談を聞く等、年間約200件



留学フォトコンテストの様子



国際ラウンジ

のイベントが行われ、延べ2,000人ほどの学生が参加している。

≡ インターナショナルカフェ

国際ラウンジに併設されている「NORTH STAR CAFE Sarah」にて期間限定で開催されるイベントである。通常は日本人の学生アルバイトが日本語で接客を行っているが、この期間は当大学の受け入れ留学生が店員となり、自分の母国語で接客するため、利用者である学生、教職員も店員の母国語で注文し、まるで受け入れ留学生の国にいるかのような体験ができるイベントである（言語が分からなくても、各言語によるメニューと注文の例文が用意されている）。

英語、中国語、韓国語、インドネシア語、フランス語等さまざまな言語に触れながら、留学生と交流することができるため、学生からの評判が良い。



≡ HUIT (ヒュイット、Hokuseigakuen University International Team)

日本人学生と、留学生の相互交流を促進し、グローバル化を推進するための学生委員会である。HUITはフランス語で8を意味するため、「∞ (無限大)」ともかけている。

国際ラウンジの設置に伴って、当ラウンジ有効利用に関するさまざまなイベントを学生主導で考えるというところから2016年度に発足した。英文学科だけではなく各学科から参加者がおり、現在15名で活動している。

≡ English Camp in 北星

地域住民との交流の一環として2016年度から行われており、異文化交流、英語を通して高校生の視野を広げることを目的としている。18名の定員に対し北海道全域から申し込みが寄せられ、選考された高校生が、在学生、留学生、外国人教員と土日の2日間原則英語のみで生活を共にする。チームに分かれてプレゼン等を行うことで、他者理解の重要性と実践的コミュニケーションに必要な英語を学ぶことができる。参加した高校生が当大学に入学するケースも増えている。

≡ 海外インターンシップ

「日本語教授法」履修者を対象に希望を募り、インドネシアの協定校であるマラナタクリスチャン大学において、現地の文化や言語を学ぶと同時に、現地の学生に日本語を教えるという10日間のプログラム。日本語の授業だけでなく日本の文化を伝えることなども実施しており、毎年度平均3～4人が参加している。

≡ 留学生バディ制度

受け入れ留学生を在学生在がサポートする、登録制のボランティア制度である。通学時の定期券購入や住民票の提出など日常的な手伝いを行う。基本的に留学生との会話は日本語で行うため、英語が得意ではない学生でも応募することができる。バディのつながりで、留学生と在学生の交友関係も広がっている。

≡ グローバル化対応のためのSD

年度当初に立てられた計画に基づき、専任の職員及び教員が参加している。2017年度には、受け入れ学生数、派遣学生数を他大学と比較し、2020年度に向けて必要なことを共通認識するための研修を行った。国際教育課の

職員だけでなく、全職員が積極的にSDやイベントに参加している。

実施体制

国際化の推進については、副学長や学部長等で構成されている国際教育推進委員会にて全体の意見を吸い上げ、国際化ビジョンを策定している。

各取り組みについては、「海外の大学と研究機関との交流を推進すること」、「学生の外国語の運用能力と理解の向上を図ること」等を主な目的として設置されている国際教育センターが中心となり実施している。

取組後の変化

国際化ビジョンを策定し、さまざまな取り組みを行い外部へアピールしてきたことが実を結び、株式会社日経BPコンサルティングの「大学ブランド・イメージ調査（2017 - 2018）」において、「語学に長けている」という項目で国公立大学も含め北海道地区1位となった。「グローバル」、「留学生の受け入れが活発である」、「国際交流が活発である」という3項目では北海道地区2位という評価を得ている。

国際教育課が国際ラウンジに併設されてから、留学について相談に来る学生が増えた。また、留学報告会についても、従前は教室を使って行っていたため、参加する学生は留学したいという目的をはっきりと持つ学生のみだったが、国際ラウンジで開催することでより多くの学生が有用な情報を得られる場へと変化した。

成功のポイントや苦労した点

この取り組みは2020年度に向けて進めてい

る途中であり、現時点で成否の評価はできないが、国際教育のイメージを全学で共有し、「グローバルの見える化」が実現できている。

計画を推進する上で苦労している点としては、学生を海外に派遣するに当たり、国際情勢の変化（テロ等）や、自然災害に対応するための情報収集が挙げられる。

また、メンタルに不安を抱えている学生が増えており、対応に苦慮しているということもある。欧米の学生は伝えることでサポートを得ようとするが、日本人学生は能動的には伝えてくれないため、何か問題を抱えていることを共有できずに日本から送り出してしまい、現地で表面化するというケースが増えている。

今後の課題・展望

「北星国際交流2020」に示した目標を達成するために、取り組みを進めていく。協定校を増やすことで留学生の派遣や受け入れを増やす予定であり、現在交流のないオーストラリア、ドイツを開拓している。

言語が話せるだけではなく、異文化背景を理解して初めて、コミュニケーションツールとしての強みを身に付けることができる。そのために全学科共通に開講される国際交流関係科目の中に、異文化理解を深める授業を持ちたい考えだ。

他大学との差別化を図るためのプログラムをより充実させ、“国際教育の北星”というブランドイメージをさらに高めていく。